
理論屋転生記

アロハ座長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理論屋転生記

【Nコード】

N3814Y

【作者名】

アロハ座長

【あらすじ】

俺は、私になる。

交通事故でこの世を去った俺は、転生後の異世界でモラト・リリフイムという領地の領主の娘・セフィリア・ジルコニアとして生まれ変わる。

文化レベルは、現代以下。中世ヨーロッパを思わせる町並み、それでいて、植生は俺の知るのとほぼ一緒。

そんな世界で、俺は生前は得られなかった両親の愛を受けていたが、そんな日々は長くは続かなかった。

多分ほのぼの、でも時々重たい。そんな大陸改革ファンタジーで
お送りします。

事故死から始まる（前書き）

序章その一、主人公が死にます

事故死から始まる

俺は、目の前から強烈な光を受けている。夜の雨の中、傘を差して渡った横断歩道に突っ込んできた白い光。

白い光　を大型のトラックと認識した時、俺の身体はあらぬ方向にねじ曲がり、口と鼻に鉄錆味の体液と咽返る《むせかえる》胃酸の混ざった物が広がる。

（　ああ、俺。明日から小学校に行くのに）

童顔、低身長 of 俺。別に小学生じゃない。それでも社会人だ。

苦労して、本当に苦労して取った教員免許と一冊の参考書が擦り切れるほど勉強した教員試験。

その結果手に入れた小学校の先生という夢は、大型トラックによって潰された。

（ああ、なんでこんな人生かな？　俺は、もっと生きてかったのに、やりたいことあったのに、もう一度生まれ変わればな）

そう思いながら、再び吐血する。確実に内臓をやられたようだ。雨に打たれる身体からは、徐々に体温が抜け落ちるのを感じる。

俺は、そこで諦めたように目を瞑る。

すっ、と背中が引かれるように意識が闇の中に落ちる。

暗い暗い闇の中、そっちに会ってみたい人たちがいるのだ。

事故死から始まる（後書き）

はじめまして、アロハ座長です。
拙い文章ですが、どうぞよろしくお願いします。

11の世界に生まれ落ちる(前書き)

序章その二、転生します

この世界に生まれ落ちる

引かれる引かれる、落ちる落ちる。

暗い暗い闇の中を落ちていくと、俺は、水の中に落ちる感覚を得る。とぼんっ、と優しく滑り落ちるように。

それからは、本当に穏やかなものだ。海のように激しい波はない、時折、誰かの話声が聞こえるが、水に反響して聞き取れない。それでも俺は、今まで失ったものが手に入った気がした。

ただ、穏やか過ぎてやる事が無い。俺は、今ここで自己紹介をしようと思う。

俺の名前は、梶子・東里^{くわじこ・とうり}。小学校の教師予定者だった。

俺の物ごころは、孤児院に始まる。つまり、身寄りのない子どもだった。両親は、二歳の時火事に巻き込まれ、亡くなったらしい。父親は全身火傷、母親は火傷と感染症の悪化で亡くなったらしい。

孤児院での生活は、悪くなかった。同年代や年上、年下が遊び相手になっていたし、園長や先生たちも笑顔だった。ただ、年を取れば、子どもたちとの距離を保ちたいと思うだろう。そんな時、マン

ガなどがあれば良かったのだが、会ったのが、歴史や農業、工業、雑学、江戸の文化、果ては将棋の指南書といった統一性のない本を片っ端から読んだ。

園長曰く「知識は本から受ければ早い。昔の入園者の中に農業と工業を学んだ奴の置き土産だ。将棋に勝ったら欲しい本を買ってやる」というのだ。別にハングリー精神はないが、おもちゃなどが小さい子に優先していたので必然的に本が残り、難しい本まで読んで、将棋を園長に挑んだりもした。

結果は、一度も勝てなかった。ただ、周り、学校には俺以上に強い奴はいないし、勉強も色んな本を読んだお陰でかなり良い成績を取っていた。

中学、高校とバイトで学費を補填しながら、孤児院の家事などを行い、チビどもに手伝わせて園内の一角に家庭菜園を作ったりもした。大きくなれば移動距離も広くなり、学校や市の図書館で本を借りた。

このとき読んだ本の種類は本当に雑食で、哲学書から、歴史書、伝記、ファンタジー、図鑑、と色々。マンガも少々読んだりもしたが、読んだマンガは同年代の読むような少年マンガとはかけ離れたもので、農業学校の話や医療マンガ、他にも図解でわかる科学技術マンガのようなものだ。

そんな感じで忙しいが充実した生活を送った。

大学の頃には、孤児院を出て一人暮らししながら、学生支援機構とバイトを使って生活していた。

そして、教員免許を手に入れ、小学校教師として人生を歩む予定だったのだが。

ああ、悔やまれる。夢だった公務員。安定の生活が、と苛立ち紛れにこの水の中で暴れてみる。しかし、身体は僅かに水を掻き分ける程度だった。しかし、外の話声に驚きの色が混じる。これは大人しくしていた方がよさそうだ。俺もこの穏やかさは失いたくない。

少し俺について語ったら疲れてきた。だんだん眠気が襲ってくる。俺は、少しの間眠りに着かせて貰う。お休み

.....

.....

...

「おぎゃあ、おぎゃあ」

「~~~~~!」

俺は、水の中から追い出され、空気を一杯に吸う。ついに、長い水の中を乗り越えて俺は天国に辿り着いたのだな、と思ったが、目が開かない。

(俺は、天国にやっと来たのか、死んだ両親に会いたいな)

と呟けば、どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえる。

天国にも赤ん坊がいるのか、早く死んでしまつて可哀そうになど
と知っているが、赤ん坊の存在はとても近く感じる。

11

「ああ、生まれた。私の可愛い子」

「生まれた。やった初めての子どもだ！」

近くで男女の声が聞こえる。

(生まれた？ 死んだの間違いじゃ？ どうなっているのだ?)

俺の声に呼応するように赤ん坊が泣き叫ぶ。何とか重い瞼を押し上げ、ぼやける視界で周囲を見る。

俺を抱きかかえるのは、白いエプロンをした女性。しかし、声の主はこの人ではない。

俺の頭が傾けられ、声の主二人を見ることが叶う。

一人は、ナイスミドルな男性。赤いタキシードみたいな服を着て、小さな顎髭と優しそうな赤い瞳がこちらを見る。

もう一人は、色白で金の髪を持つ女性。とても疲れ切った表情をしているが、男性同様に優しい青の瞳を向けてくる。

「私の可愛い子ども。顔を良く見せて」

「この顔は、君に似てさぞ美人になるだろう」

「いいえ、目はあなたそっくり。とても意思の強い子に育つわ」

二人は俺に向かって仲睦まじい会話をしている。

そして気がついた　俺が赤ん坊だったことに。

俺は、あらん限りの声で叫んだ。今の状況に対する歓喜なのか、転生なんてありえない状況に対する発狂なのか、それとも、この幼いからだの空腹を伝えるためなのか。

二度目の人生は、こうして始まった。

領主の娘セフィリア・ジルコニア(前書き)

本編まだまだです。ごめんなさい

領主の娘セフィリア・ジルコニア

俺は、生まれ変わった。

そして、今年で三歳になる。

「セフィリア様！ セフィリア様はどちらに！ ジームフル！ そちらは」

「いいえ、キリコ！ 全くセフィリア様はあんちゃがお好きで」

俺を必死に探しまわっているのは、俺の、いや、もう私と言うべきだろう。

改めて、私の家の従者。中年女性の方は、侍女長を務めるキリコ・デールテイラーさん。初老の男性の方は、執事長を務めるジークフル・ムルムトフさん。二人とも私のお父様を慕ってこの家に仕えている。

そして、私は、追つての彼らを振り切り、お父様の保有する蔵書をこっそりを覗くのが日課なのだ。

「辞書を持って、うん。誰もいない」

お父様から頂いた辞書を使って、蔵書を端から読む。言葉を交わせるのだが、文字体系は、前の世界と全く違う。日本語でも英語でも、ドイツでもフランスでも、サンスクリットでもない。全く知らない言語。それなのになぜ聞き取れるのかにはいくつか推測しているが、もっとも可能性が高いのは、母体の中にいる時、聞いていた言葉から言語を自然と理解したのだろうという説だ。両親ともに私がお腹の中にいる時、良く話掛けてくれた。そして、生まれた後も良く発育するようによく話掛けてくれた。そのお陰で、言葉は流暢になったと思う。

「はあ、私。既に来ることはしたくない」

言葉遣いが私、と丁寧になったのもこの半年の賜物。周りの人間に怪しまれないように出来るだけお母様の言葉遣いを真似した結果だ。ただ、時々大人びていると思われるので、こうしたやんちゃもしでかす。

「ええつと、前読んだのは【グラートリア王国の歴史】の近代あたりだったよね」

そう言いながら、重い羊皮紙の本を引っ張り出し膝の上に広げる。片方の手で歴史書。もう片方の手で辞書を使い、分からない文字や曖昧な表現を一つ一つ調べる。これが意外と面白い。辞書は分かりやすいように書いてあるが、辞書の説明にも分からない意味の単語

がある。更に調べ……と芋蔓式に分からない単語が出てくる。

「えつと『近年のグラードリア王国は、中央の王都と二十四の領地に分かれ、東側に六つ、南側に六、西側十二にと分かれ、北にエラヴェール皇国が存在している。エラヴェール皇国との関係は概ね良好であり、互いに不可侵条約を結んでいる、と』たしか、私のいるモラト・リリフィムの領地は、東側にあるのよね」

この歴史書を少しずつ読み説いて分かったのは、この世界は異世界であるということだ。歴史書の最初のページにある測量もままならない大陸東側の地図は見たことが無い。更に、文化レベルも中世ヨーロッパレベルだろう。前に見た酪農の本は、宗教本では無いかと思うような内容で、『神の恵み』などの単語を乱用した経験則に基づき初歩的な農業だった。

「グラードリア王国の歴史は、五百年続いて、教会と共に発展したのね。でも、この本って十年以上前の本だから変わったかもしれない」

本の最後の日付を確認して溜息を洩らす。

現代のように、即時で情報が入ってくることに慣れ過ぎているように感じる。だが、温故知新、古い話、特に国建国までの英雄記や軍略の本は、今までになく新鮮で私の心を擽る。

「次はなんの本を読もうかしら、そうだ！ 船乗りの航海日誌があった」

「セフィリア様！ 見つけましたぞ！ またダイナモ様の書齋に忍び込んで」

ジームフルに見つかってしまった！ 書齋の入口を塞ぐように立たれて逃げ場が無い。

「今日という今日は、逃がしませぬぞ！」

「ジーク？ 私、お勉強しているよ。お父様の書齋の本は、お父様が領主になるために読んだ本だもの。領主になるには必要でしょ？」

「それとは別で、淑女となるために覚えて頂く知識もございます」

「私、華やかな貴族。嫌い」

そう言って、子供っぽくジークフルに対してそっぽを向く。

「あらあら、セフィリアは、お父様が大好きね。私、妬いてしましますわ」

入口からすつと現れた金髪に薄いピンク色の服を着た美女は、頬に手を当てて、あらあらと優しい頬笑みを浮かべている。そう言って膝元に駆け寄れば、抱き上げてくれる。

「お母様！ 私、お母様も大好き」

「私も大好きよ。でも、女の子はもつとお淑やかじゃないといけな
いわ」

「私、お父様みたいになる！ だってお父様、カッコいいんだもの」

「ふふふ、そうね。じゃあ、淑女のお勉強はやめにしましょうか」

「お、奥様。そう甘やかして貰っては困ります」

ジークフルが困った表情を作る。その時、この館（ というよ
りも小さな城）の中にベルの音が鳴る。

「あつ！ お父様だ！」

「あつ、待ちなさい！」

お母様の腕の中から飛び降りて書斎の入口へと走るが、一度振り
返り、取り出した本を片づけるか迷う。

「はあく。仕方がありません。本は私が片づけます。奥様とセフィ
リア様は、お出迎えしてください」

そう言って私は、元気に掛けていった。

入口には、赤を基調としたタキシードを着た男性が侍女長と数名
の侍女たちに出向かれる。

「お父様！」

「セフィリア！」

駆けつけ、お母様と同様抱きかかえられる。後から駆け付けたお母様は、笑顔でお父様を出迎える。

「お帰りなさい、ダイナモ」

「ただいま、愛しのリリィー」

そのまま、私を挟んで二人は、頬にキスをし合う。本当に仲睦まじいことだ。

領主のダイナモ・ジルコニア　このモラト・リリィムの領主で広い農地を持つ。そして、特徴として別に裕福じゃない。なぜ？それは税収の多くを民に還元しているためだ。現代で言う社会保障制度を確立しようとしているようだ。そのために、貴族・伯爵という爵位三位であっても他の貴族より清貧で暮らしている。

執事や侍女もお父様と縁のある人たちで、お父様は縁や民を大切にするために領民に慕われている。

領主の妻リリィー・ジルコニア　貴族の妻は貴族。が常な西側王都貴族と違いお母様は、農家の娘らしい。さらに今はいないおじ

い様は、商家でおばあ様は、農家出身で民に慕われ民に分け隔てなく接するお父様の相手に相応しいと思う。

お母様は、貴族の妻という立場にも関わらず家事などをこなす。また統治のための仕事も行っている。

私は、前世で元々持っていなかった両親の愛を今の生で手に入れた。

「ああ、愛しいセフィリア。今日は何をしたんだい？」

「書斎で本を読んでいました。他にもお庭に野菜を作る準備を一人でしたのです」

「そうか、そうか。今日も良い日なんだな」

「はい」

「もう、セフィリアは、農家の血筋をちゃんと引いているのね」

家族団欒の光景。いつか、諦めた光景が今ここにある。

それだけで私は幸せだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3814y/>

理論屋転生記

2011年11月10日01時07分発行